

## 「5年・キンモクセイの花粉(1)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

今年もキンモクセイの時期がやってきた。花が咲いたことが校舎内にもわかるのは、ジンチョウゲ(沈丁花)、タイザンボク(泰山木)、それにキンモクセイ(金木犀)だけである。本校の講堂前には、実に見事な金木犀があって、ここ数日で満開になった。



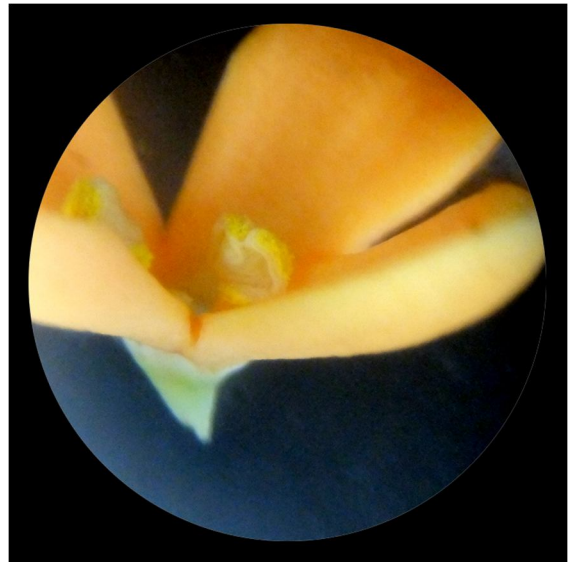
これだけたくさんの花をつけるのに、キンモクセイは過去一回も結実したことがない。これには理由がある。キンモクセイには雄株と雌株があり、日本で植えられているものは、通常雄株だけである。雄株のほうが圧倒的にたくさんの花をつけるのだ。これでは、実ができるわけがない。あれだけ美しく、すばらしい芳香を放つのに、花としては役にたっていないわけだ。



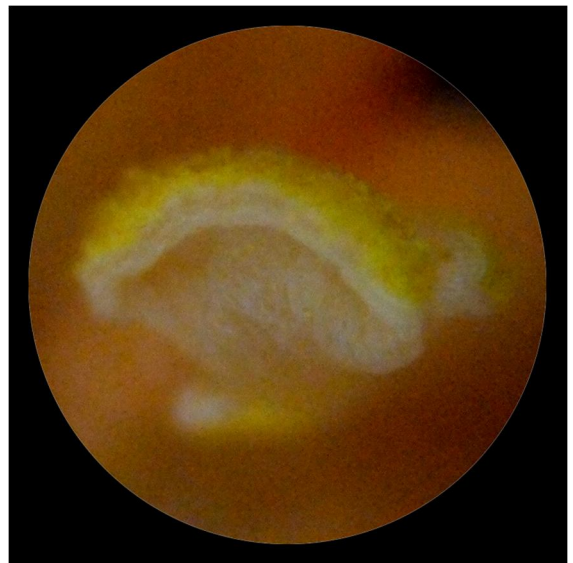
たとえ雄株だけ---つまり雄花しか咲かなくても、雄花の役割は花粉を作ることなので、その中にある雄しべには花粉があるはずである。キンモクセイは、本校

の「わたしたちの歌」(第二の校歌のような曲)の3番(秋)にも唄われていて、子どもたちにとっても非常に馴染み深い植物である。私はそのキンモクセイの花粉を子どもたちに見せたいと思った。

私はT.Tの先生にキンモクセイの枝を切ってきてもらい、7種類の花粉の観察が終わった子どもたちに観察させることにした。



まず、ピンセットで花を一つとって、反射光×40で観察させてみた。たった一つの花でも、強い芳香を放っている。4枚の合弁の中心に雄しべが2本あるのがわかる。花粉らしきものも見える。



反射光×100で見ると、その花粉らしきものが、粒々に見えてきた。確かに花粉が存在するようだ。